
バカと闇の白夜叉と

守護神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと闇の白夜叉と

【Nコード】

N6086W

【作者名】

守護神

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次作です

設定は主人公は最強 秀吉は女 雄二は素直です。

プロローグ（前書き）

はじめまして守護神です。初投稿になりますので、更新めっちゃ遅いですし誤字脱字も多々ありますし文才もまったくありませんのでそれでもおkだとうう方はどうぞ、カップリングは明久×姫路×美波、雄二×翔子、康太×愛子、オリ主×秀吉×優子、でいきたいです。オリ主は最強で雄二は翔子に対する思いが原作とちよつと違います。

あとオリキャラも少しだけだそうかなとおもってます。

主人公の名前は山神友貴は過去に暗い思い出があり人間関係に一線引くよう接していた、そのため友人は多いのだが、「親友」と呼べる友達は一人もいなかった、そんな友貴にFクラスのメンバー明久、雄二、^{ムッリーニ}康太、秀吉、美波、瑞樹、Aクラスの人々も混ざりはちゃめちゃな学園ライフがはじまります。

プロローグ

薄暗い戦場、白い装飾を身にまとい当たり一面の敵の死体を見下ろして血の付いた日本刀を持ち立ちつくしている、敵の数は100人以上の暴力団組員、その敵をたった小1時間で全滅させたのだ。

その姿からこう呼ばれた「白夜叉」、

こうして彼に潰されていく暴力団は数知れず、闇の世界の白夜叉と呼ばれ続けている。

だが、彼は何のために、誰のために、戦っているのかは、誰も知らない。

しかし、彼の目はひどく青く澄んでいて何のためらいもなく人を切り倒していく姿は夜叉そのものだった。

彼の名前は山神^{やまがみ} 友貴^{ともき}

闇世界の狩人 白夜叉と呼ばれている。

プロローグ（後書き）

すみません。

本当にごめんなさい。

だらだらになってしまった。

キャラ設定（前書き）

どうも守護神です。
今回はキャラ設定

キャラ設定

やまがみ
山神 友貴

身長は雄二と同じくらい

体格は細身だが筋肉で引き締まっている、髪は銀色で明久と同じくらいで容姿はいつもニコニコ笑っている顔をしているがキレたりすると鋭い目つきになる。

特技

剣術 示現流免許皆伝 天然理心流免許皆伝 宝蔵院流槍術免許皆伝

武術 ムエタイ カポエラ 空手 柔道 中国拳法 忍術
料理 プロ並み

好きな事

寝ること お菓子づくり

嫌いな事

孤独感 卑怯なやつ 仲間の事をバカにするやつ

みんなのお兄ちゃん的存在 特に明久に

異性にめっばう弱く接し方を知らない。

両親は幼い頃に他界し今は一人暮らし。

愛刀は斬鉄剣正宗

文月学園には一年次からいるが振り分け試験の日に不良の喧嘩に巻き込まれ欠席のためFクラス。

特殊な能力を持っており体が炎である。

中学の通り名は「破壊神」

成績は単教科800〜1000点は取れる。

総合教科は8000点以上とれる。

召喚獣は新撰組の袴に武器は十文字槍に日本刀

腕輪はの能力は「火炎」武器などに火をつけられる。

点数消費は30点で一回点火

吉井 明久

基本的に原作通り

しかしけんかに強く中学の時の通り名は「雷神」
得意武術は空手

坂本 雄二

基本的に原作通り

通り名は「悪鬼羅列」
得意武術はボクシング

土屋 康太

基本的に原作通り

けんかに強く中学の通り名は「弧黒の忍者」(こっくうのにんじゃ)
得意武術は忍術

木下 秀吉

基本的に原作どおりだがほんととは女

けんかに強く中学の通り名は「疾風の剣客」
得意武術は剣術

流派は小野派一刀流

実は女

木下 優子

基本的に原作通り

剣術に長けていて流派は小野派一刀流

秀吉を女と知っていて隠している。

島田 美波

基本的に原作通り

姫路 瑞樹

基本的に原作通り

キャラ設定（後書き）

どうも作者と

友「友貴です」

友「強すぎだろ」

そうだね

でも書きたかったんだもん

友「俺知らないよ」

いいもん、がんばるから

次はいよいよ本編へ

第1話出会い（前書き）

今回は主要キャラをだしたいです

第1話出会い

友貴サイド

いつもの通学が桜色に変わるこの季節いつも通りの時間に歩いているとチンピラに絡まれている2組に会った。

それは、疾風の剣客事木下秀吉と木下優子だった。しゅうぶのけんかく

お互いちゃんとした形での話はしたことがないものの一度だけ手合わせたことがある。

その時の勝負は引き分けで終わったが2対1で2人とも小野派一刀流の免許皆伝相手に引き分けるのが精一杯だった。

いつもの2人なら、チンピラ相手などぶっ飛ばしてこの場を終わらせているだが、今日は状況が違った。

今日は二人とも刀となるものがなく、相手の手の中にはサバイバルナイフが握られていた。

ちと、やばいかな。

「なあ少しツラ貸せよ嬢ちゃん達よ」

「この前はうちのもんが随分とお世話になったからよお礼がしたくてなヒヒヒ」

「抵抗するなら力尽くで連れて行くけどな」

「この前はそつちから喧嘩を吹っかけてきたんじゃない、わたし達に非はないわ」

「そつじゃ！、そつちが悪いのじゃ それとワシは男じゃ」

いや、おまえは女だから！！

なんてつつこみ入れている暇は無いんだった
早く助けに行かないと

「おい、お前らその辺にしとけよ 女の子2人によってたかつて情けないぞ。」

「お、お主は・・・」

「な、何よ・あんたまた一戦交えようってゆうの？」

「まさか？ 困ってそうだから助けに来たんだよ」

「なんだおめえは！！ ブツ殺されてえのか」

「それはこっちのセリフだ」

まず一撃 グラサン掛けた奴の後頭部に右ハイキックを食らわせて
右に居たサバイバルナイフを持ったやつにそのまま延髄蹴りを食ら
わせ沈めて最後の一人は左ミドルキックで沈めた。

「ふう、まあ気絶しない程度にやったから自力で帰れよ、あとナイ
フは没収な」

そう言い放ち、自分の鞆を拾い啞然としている2人に対して

「おい、なにしてんだ 遅刻すんぞ」

「あ、そうじゃな 姉上ゆくぞ」

「うん／＼」

なんでか知らんが姉の方は顔を赤らめていた。

第2話特別観察処分者（前書き）

今回は友貴の召喚獣について書きたいです。

第2話特別観察処分者

とき side

そんな朝のいざこざがありなんとか学校までたどり着いた。

校門の前には色黒のスポーツマン体型の補習の鬼こと西村先生が立っていた。

友、優、秀「おはようございます」

「おはよう、木下姉弟、・・・山上」

なぜに僕の顔みて残念な顔するんでしょうかね？

西村先生「これが振り分け試験の結果だ」

「ありがとうございます。」

西村先生「山上・・・お前もつくづく運がないとゆうかなんとうかな・・・」

友貴「まあしょうがないですよ〜」

西村先生「まあ運も実力のうちって、元気出せ そのうち良いこともあるさ・・・ それとこのあと学園長室に行くように」

友貴「へ？なんでですか？」

西村先生「ふふつまあ行つてからの楽しみだ」

なんだそれ？

まあいいや、とりあえず行ってみよう

「（コンコン）失礼します。」

「来たねジャリガキ、入りな」

そこにいたのはここ最高権力者藤堂カヲル学園長が座っていた。

「なんのようですか、ばあさま」

「学校でその名前だよぶんじゃないよ」

それと同時に僕の育ての親でもある。

「ちよつとあんたの召喚獣についての説明さ、口で説明するのも面倒だね、召喚してみな」

「はい、試獣召喚^{サモン}」

ポンツ ↑ 僕の召喚獣登場

「なにか変わった事はあるかい？」

「いえ別に変わった事はないですが・・・」

「そうかい、それなら一回召喚獣を消すよ」

フィールドを消し、僕の召喚獣も消えた

そうして学園長はノートパソコンを打ち込みこちらにむき直した。

「今度は召喚フィールドを出すだけあんたは召喚獣になっちまうよ
うになってるからその気でいな」

「??わかりました」

なにいつてんだか

僕自身は召喚獣になれないでしょうに

「それじゃいくよう」

そういつて召喚フィールドを出された瞬間・・・！

ポンツ ↑ 召喚獣になった僕登場

『なにこれえれれれれえええええ』

「ふう・・・なんとか成功さね」

『・・・詳しく説明してください』

声高いな、目線もだいぶ低いし

「説明するも何もそのまんまさね、あんたの意識を召喚獣に移した
だけだよ」

『・・・』

「それに伴いあんたを特別観察処分者にするからね」

『なしてーーーーー』

「ほら用件は済んだからはやく教室にいきな」

『いや、自分この姿のままなんだけど・・・』

「召喚フィールドからでたら元の姿に戻るよ」

なんでもこの姿では五感はあるし物にもさわれるらしい、

自分だけルールが少し変わるそうで、なんでも戦闘時自分が召喚フ
ィールドにいる間、相手が自分を指定していなければフィールドを

離れても敵前逃亡にならないとか。召喚フィールドがある限り、自分が元の身体に戻れないためらしいです。

もちろん勝負を申しこまれている場合は戦闘に参加しなくてはいけないそうです。

「最後になるが、召喚フィールドが張られていれば問答無用でアంతは召喚獣に成る。」

せいぜい何かの拍子に召喚獣にならないように気をつけな」

まったくどうなるんだか……

ちなみに「黒金の腕輪」なる物をもらった。

まあこれはみんな知ってるよね。

そんなことがありFクラスの前に来るとひどいもんだった腐った貴、

傾いた黒板

男ばかりのむさい教室

廃墟　とゆう言葉が頭の中を駆けめぐる

まあいい住めば都だ

なんとかなるだろ。

そう思いクラスのドアを開けた。

第2話特別観察処分者（後書き）

うーん

うまくまとめきれなかった

次回はうまくまとめたいです。

第3話 Fクラス（前書き）

今回はFクラスに合流します。

第3話 Fクラス

ガラッ

雄「早く座れウジ虫野郎」

友「・・・何やってんの雄二」

ドアを開けると赤いたてがみの野性味あふれる悪友の顔があった。

雄「ああ 友貴か 先生が遅れているらしいから教卓に上がってみた」

友「そうか」

いろいろと聞いてみたい事もあったが幾分自分は口があまりうまくないため黙って席に着くことにした。

するとすぐに学園を代表するバカがやってきた。

アキ「すみません遅れちゃいました」

雄「さっさと座れウジ虫野郎」

アキ「・・・なにやってんのさ、雄二」

雄「クラス代表だからな、俺の兵士たちをみていた」

福「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

福「皆さん、席について下さい。今日からFクラスの担任をさせていただきます。これから一年間よろしく願います。必要なものがあれば極力自分で調達して下さい」

あの...ここ学校ですよね？

「それでは、廊下側の人から自己紹介をして下さい」

先生の言葉を皮切りに、生徒たちの自己紹介が始まった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

「……土屋 康太」

あれは康太か、相変わらずの無口だな、まあ人の事言えないけど。

「島田美波です。海外育ちで日本語の会話は出来るけど読み書きが苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

へえ、なかなかアクティブそうな少女だな。

「……吉井明久を殴ることです」

前言撤回、恐怖です。

明久に手を振っているけど明久は震えているな。

次はアキか

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』」

「はいっ！ 質問です」

「あ、は、はい。 何ですか？」

「何でここにいますか？」

あるF男子生徒がみんなの疑問を代表して言いました。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいまして……」

F『そう言えば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

F『ああ、科学だろ？ あれは難しかったな』

F『弟が事故にあって全力が出し切れなくて』

F『黙れ一人っ子』

F『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

F『今年一番の大ウソをありがとう』

姫路さんの欠席理由を聞いて、クラスメイトが訳のわからない言い訳をし始める。

姫「で、ではっ、一年間よろしく願いますっ！」

席につくや否や、安堵のため息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路

「き、緊張しましたぁ……」

「あの…吉井君…」

「姫路、明久がブサイクでスマン」

雄二の明久いじりが始まった。

「そうでもないですよ！ブサイクどころかその…むしろ」

「まあそついえば見てくれは悪くないよう見えるかもしれない。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「え、誰？」

「確か久保…」

「え、どの久保さんだろ？」

「……利光だったかな」

久保利光 Aクラス ♂

「……………」

「明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「半分は冗談だ。安心しろ」

「ねえ？残りの半分は？」

「はいはい、その人たち、静かにして下さいね……」

バキィ！

「替えを用意してくるのでしばらく待って下さい」

先生はどこかへ行ってしまった。

「雄二、友君ちよつといい？」

そう言っで自分たちを廊下に連れ出す明久

友「で、何なんだ話っで？」

雄「まさか試験召喚戦争をやるっで言っくんじゃ無いだろうっな？」

アキ「……いや、その通りだよ」

友「そうだと思った」

アキ「何で分かったの？」

友「なんとなくかな？」

雄「なんでおまえがいきなり試験召喚戦争なんてやるっとおもったんだ？」

「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備

なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校にくるわけが――」

「お前がこの学校を選んだのは、＜試験校だからこその学費の安さ＞が理由だろ？」

そうなんだ アキはすぐに金使い込んだじゃうから

雄「姫路のためか」

アキ「ちちちちちがううよ」

雄「まあいい俺もやろうとおもってたんだ いっちょやってやろうぜ」

こうして自分たちの戦争がはじまった。

第四話試験召喚戦争（前書き）

今回は短めです

第四話試験召喚戦争

先生が戻ってきて自己紹介が再会されて最後の雄二の番になった。福「では最後はクラス代表の坂本雄二君、お願いします。」

雄「うつす 了解」

雄二は教壇に上がりゆっくりとみんなを見渡して

雄「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

こっからが雄二の見せ所だな。どうやってFクラスの皆を乗せるかな？

「さて、皆に一つ聞きたいことがある」

雄二が全員の生徒を見るように告げる。

間のとりかたがうまく、全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆が雄二を見た後、雄二は教室の各所に目を向けた。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて皆雄二の視線を追い、それらの備品をみてしまう。

第四話試験召喚戦争（後書き）

今回は短いです

感想お待ちしております。

第五話 Fクラスの戦力（前書き）

今回はFクラスの戦力確認です。

第五話 Fクラスの戦力

突然の雄二の宣言にクラス中がざわめきだす。

F『勝てるわけがない』

F『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

F『姫路さんがいたらなにももらない』

雄「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

しかし、そんな中で雄二は自信満々に宣言してみせた。

F『何を馬鹿なことを』

F『できるわけがないだろう』

F『何の根拠があつてそんなことを』

F『姫路さん結婚してください』

普通はそう思うよね 最後はよくわからんけど

雄「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つことの出来る要素がそろっている」

この雄二の言葉をうけてFクラスの皆が騒ぎ始める。

雄「それを今から説明してやる」

得意の不適な笑みで説明を始める。

雄「おい、ムッツリー二に。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

ム「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

姫「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。

姫路はスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔に付いた畳のあとを隠しながら壇上へ歩き出した。

雄「土屋康太。こいつがあ有名な寡黙なる性識者 ムツツリーニ

」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

ムツツリーニ。この名前は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑をもって挙げられる。

F『ムツツリーニだと・・・・・・・・？』

F『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・・・・・・？』

F『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ・・・・・・・・』

F『ああ。ムツツリに恥じない姿だ・・・・・・・・』
もう隠したって無駄なのになあー

雄「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

姫「えっ？わ、わたしですかっ？」

雄「ああ、うちの主戦力だ。期待している」

ん？なんかドアの外に気配を感じるな・・・

F『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

F『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

F『ああ、彼女さえいれば何もいらなないな』

誰だ？さっきから姫路にラブコールしてる奴は？

雄「木下秀吉だっている」

木下秀吉。学力ではあまり名をきかないが、他の事だったら有名だ。演劇部のボーイだったりと、双子の姉がいたり。

F『おお．．．．．！』

F『ああ。あいつ確か木下優子の．．．．．』

F「当然俺も全力を尽くす」

F『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

F『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

F『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じで体調不良だったのか』

F『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

やっぱり僕の存在は知れ渡ってなかったようだな。

まあその方がいろいろやりやすいからいいけ．．．

雄「いや、Aクラスレベルの奴はもう一人いる 友貴たってくれ」

なんだ結局ばらすのか

友「ん 了解」

雄「こいつはAクラス学年主席をとれるほどだ」

F『いや、聞いたことがないな．．．』

そんなささやきが所々か聞こえてきた

そりやそうだ 1年のときはあんまり学校来てなかったからな

雄「そうか．．．じゃあこういえばわかるか．．．．．『破壊神』と．．．」

F『『『『！』』』』

クラス全体に緊張が走る

F『あ．あの破壊神なのか．．．．』

F『喧嘩の時は本気の時、それ以外は素手でやるあの．．．』

F『文月四天王の中で一番強いとか』

うーん まあ言われていることは間違っていないからな

友「あ！そう言えばみんなには言ってなかったけど僕は（特別観察処分者）です」

一同『は？』

F「・・・それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

友「いや ちょっと僕のは違うんだよね 福原先生、召喚許可をおねがいします」

福「ハイ 承認します」

フィールドが開かれた瞬間

ポンっ ↑友貴が召喚獣になった音

男子一同『なあああにいいいいいいー』

姫路 美波 秀吉『か・かわいい』

雄「おまえ 何ともないのか」

友「ああ 基本的には明久と同じだ しかしフィールドバックが通常より大きいんだ」

F「こ・こんなすごいやつらがいるんだもしかしたら俺たちできるんじゃないか」

F「おいおい、俺達ならやれるんじゃないか！？」

F「なんだかやれそうなきがしてきたな！」

こんなにすごいメンバーが揃っていれば打倒Aクラスも夢じゃなくなってきた。

今クラスの士気は確実に上がっていた。

雄「それに、吉井明久だっている」

・・・シーン――

あーあ また明久で締めるのか

アキ「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まった

くそんな必要はないよね!」

F「誰だよ、吉井明久って」

F「聞いたことあるか?」

F「さあ?初めて聞いたが。このクラスにいるのか?」

アキ「ホラ!折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし!僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを――

――って、なんで僕を睨むのさ雄二!」

雄「そうか。皆はこいつのことを知らないのか」

「ならば教えてやる。」

「こいつの肩書きは《観察処分者》だ!!」

F「・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ?」

アキ「ち、違うよっ!ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

雄「そうだ。バカの代名詞だ」

アキ「肯定するな、バカ雄二!」

あーあ アキかわいそう

アキ「わーん 雄二がいじめるよ」

友「よしよし明久 兄ちゃんが仇とってやるからな」(キツ)

雄「(ビクッ)とにかくだ。俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

雄「皆、この待遇は大いに不満だろう?」

「『当然だ!』」

雄「ならば、総員武器 ペン をとれ!出陣の準備だ!」

「『おおーっ!!』」

雄「俺らに必要なのは卓袱台ではない!俺らに必要なのは・・・」

「『Aクラスのシステムデスクだ!』」

雄二 後で覚悟しとけよ・・・

第五話 Fクラスの戦力（後書き）

どうでしたか？

相変わらずの駄目文ですね

もっとうまく書けるようにがんばります。

第6話試験召喚戦争直前（前書き）

寒いですねー

第6話試験召喚戦争直前

「明久にはDクラスへの死者になってもらおうと思う。無事大役を果たせ！」

おいおい雄二 完全に字が死人の方になってるよ

まったく雄二はそんなにお兄ちゃんにお説教してほしいのか…

友「まってくれ雄二、それは僕が行くよ」

雄「そ…そうか、じゃあよろしく頼む」

友「ん…行ってくる…」雄二、後で話がある」

雄「（ビクッ）あ…ああわかった」

そのころ教室の隅で

秀「雄二は完全に友貴を怒らしてしまったようじゃな」

庚「…それはまずい」

美波「土屋 なにがまずいの？男同士の喧嘩なんてよくあることじやあないの」

秀「うむう “普通”の男子、ならばの、雄二も昔は悪鬼羅列と呼ばれていたほどだからの」

庚「…それよりもまずいのは友貴の方」

姫「山神君のなにがまずいのですか？」

秀「むう…奴はのう少し特殊な能力を持っているのじゃ、やつは生まれながらにして“炎”なのじゃ」

姫 美波「炎?！」

秀「日常生活は友貴がしとるネックレスに埋め込まれとる天眼石によつてその能力は封印されているの

じゃ、この封印が解けるのは友貴の姉上殿とわしと姉上だけじゃ」

姫「え!山神君つてお姉さんいるんですか?」

秀「うむ 3-Aにいる小暮 アオイというお方じゃ、…姫路に島田よこの小暮殿の話は絶対に友貴の前ではしてはならんぞい」

真剣な表情で語る秀吉の顔に二人はうなずいた

秀「まあ小暮殿の事はワシらも詳しくは知らんのじゃがな あの時
は……まさしく修羅じゃったの…(がくブル)」

庚「……コクコク(がくブル)」

二人の様子に姫路と島田は驚愕した なんせあのやさしそうな明久のお兄ちゃん的存在が人をこんなにも恐怖させるなんて想像もできないのである。

秀「おっと 話が逸れてしまったの、友貴の具体的な能力は体が“炎”なのじゃ」

姫 島田「は?」

秀「たとえばワシが日本刀で切つても炎じゃから切れんとゆうことじゃ」

2人はあまりにも非現実的すぎる事に言葉を失った。

秀「まあ一緒にいれば次期にわかるじやろっ」

そんなこと話してると友貴が戻ってきた

友「……………ただいま」

少し苛立ちながら帰ってきた。

秀「ど…どうしたのじゃ友貴よ」

友「…………ん、いやちよつとな 嫌なことがあったただけだ 気にするな」

雄「ん？無事だったか友貴 しかも無傷か……………」

友「…………いや、戦線布告したらいきなり襲ってきたからドア吹っ飛ばしたらなにもしてこなくなったよ」

雄「…まあいい、今からミーティングを行うぞ」

Fクラスでは行わないようで、扉を開けて外に出て行った。

秀「大変じゃったの」

ぎゅっネックレスを握りしめ少し息を吐いてから

友「にこ」「何でもない、だいじょうぶさ」

姫路・秀吉の順番で明久に声をかけて雄二のあとについていった。

「……………（サスサス）」

そのあとに康太が自分の頬のあたりをさすりながら続いていた。

友「康太、ほつぺたの後なら消えているよ」

庚「……………！！（ブンブン）」

友「今更否定しても遅いだろ。」

アキ「そудだよ、ムツツリーニがHなのは知ってるから」

庚「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレてるのに否定し続けるなんて、ある意味凄いなと思う」

「否定していなかったら、ムツツリーニなんてあだ名を付かないと思うけどな。」

「……………！！（ブンブン）」

「……………何色だった？」

「みずいろ」

即答かよ

雄「友貴、戦争開始は何時って伝えてきたんだ？」

友「ん？雄二に言われた通り3時って伝えてきたよ」

美波「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

雄「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

明「そう思うならパンでもおこってくれと嬉しいんだけど」

友「ほれっ明久 弁当」

アキ「ありがとう」

明久に弁当を渡して自分の弁当を食べようとしたところで3つの殺気を感じた

姫（ま、負けられないです）

美波（う、ウチもがんばらなきゃ）

秀（友貴の手作り弁当かの……………）

まあ明久に弁当を作り始めた理由がこいつの食生活にあつたからな塩や砂糖を食べると勘違いしていきっているからな…

瑞 美波「……………あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

明久「え？」

へえ あの二人って意外に積極的なんだな

雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久「うん！」

吉井が心底嬉しげな笑顔をする。と、そこで視線を感じたので目を向けると、

秀吉「……………」

僕の方へ向けてジト目で見ている。

友「あー秀吉 僕も明日でなければ弁当作ってこようか？」

秀「ほ、本当かの？」

友「ああ迷惑でなければ」

秀「うれしいのじゃ／＼／」

雄「ニヤニヤ」おい2人とも熱くなってるどころ悪いがミーティングを始めるぞ」

秀「あ、熱くなってなどおらぬ」

友「??？」

なににあつくなるんだ？

秀「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじゃろっし、勝負に出るならAクラスじゃろっし？」

瑞「そういえば、確かにそうですね」

雄「まあな。当然考えがあつてのことだ」

瑞「どんな考えですか？」

雄「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明「え？でも僕らよりはクラスが上だよ？」

明久の意見はもつともだ。だがFクラスは全体的な成績では劣っていても、個人の一部の成績はその者によってはAクラスをも凌駕すると言いたいのだろう

雄「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

明「えーっと……」

明久が周りを見渡してふむつと唸る。

明「美少女三人と鬼神が一人と馬鹿が二人いるね」

おい、誰が鬼神だ

雄「誰が美少女だと！？」

明「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」

はは…雄二は全く…

雄「ま、要するにだ」

雄「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

明「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

友「何にも策がなくAクラスに挑むのは無謀だよな」

雄「そうゆうことだ、今回のDクラス戦はAクラス戦に必要なプロセスということだな」

雄二が皆に視線を向けながら仰々しく語る。

瑞「あ、あの！」

唐突に姫路が大きな声で話を切る。大人しい彼女にしては珍しいな

雄「ん？どうした姫路」

瑞「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

雄「ああ、それが。それはついさっき、姫路の為に明久に相談されてー」

明「それはそうと！」

明「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄「負けるわけがないさ」

笑い飛ばす雄二。奴はかなりの策士だ。すでにDクラス戦の戦略も練っているのだろう。

雄「いいか俺らのクラスは…最強だ」

不思議だ。こいつがこの言葉を言った瞬間でできるような感じがした

のだ

美「いいわね。面白そうじゃない！」

秀「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

瑞希「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。普通なら底辺クラスであるFクラスが頂点クラスであるAクラスに勝つなんて文字通り天地がひっくり返ってもあり得ないかもしれない。でも、不可能を可能にするのもおもしろい友「…やるからには…勝つぞ！」

「「おう」」

さあがんばろう

第6話試験召喚戦争直前（後書き）

なんか 疲れがぬけない

第7話Dクラス戦開始（前書き）

戦闘
歌詞

第7話Dクラス戦開始

Dクラス戦開始!!

何だけど・・・

友「あーあ早くテスト終わらないかなー」

かきかきかきかき

30分後・・・・・・・・・・

友「終わったー」

雄「おし、じゃあ早速先鋒部隊に加わってきてくれ」

友「了解!!」

D「よし、Fクラスの……げっ！ あれは、さっきの！ まさかあいつは…山神か！ なぜやつがFクラスに…」

D「うつ、ウソだろ！？ 学力は教師レベルだと聞いているぞ」

D「くそっ、騙された！ そうだとわかってたら、中堅に回ってたのに!!」

友「よっしゃーお前らFクラスの根性みせてやれ！」

F「おおー」

D「怯むな いけー」

D「・・・お、おー」

体制は整ってないが気合いでねじ伏せる！

友「行くぞ 試験召喚獣 サモン」

まあ言わなくても召喚できるけど…

赤いガラの新撰組の羽織着ている召喚獣になった僕の上に点数表示される

山神 友貴 日本史 1021点

D「……は？」「」

『いくぞー』

十文字槍でフィールド内の敵に向かって叩き付ける

DクラスA 日本史 0点

友「行くぞ野郎ども反撃だ」

F「……おおおおおー」「」

まさか習わされてやってた槍がここで役立つなんてな

しばらく先鋒の指揮をとっていると中堅部隊がやってきた

友「よし、先鋒部隊は中堅部隊と交代だ、フィールドの残っている敵は僕が引き受ける サモン」

残りは……10人か……よし

D「く……舐めるなよ 相手は1人だ囲んでやっちまえ」

D「そうだ 所詮はFクラスだ、どうせバカの吉井達と一緒にいるんだからこいつもばかだ」

ブツンッ

『あのな、俺のことはバカにしようが何をしようがかまわねえよ、でも仲間をバカにするやつだけはゆるさねええええええ』

持っていた槍をすてて日本刀を抜きはなち構える

『火炎』

日本刀に炎がつき相手を全力で切り倒す

すぐに相手は逃げだしフィールドは俺だけになる

『おっしや野郎どもおせおせだ』

「……おおおおお」「」

第7話Dクラス戦開始（後書き）

すみません今回はここまでです

新キャラ紹介（前書き）

キャラ増やします

[illegible]

新キャラ紹介（後書き）

1人だけですがよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086w/>

バカと闇の白夜叉と

2011年12月3日22時36分発行